

一人情シスでも止まらないIT環境を 中小企業のためのネットワーク運用術



■はじめに 中小企業の「情シス1人時代」が迎える限界

「システムは増える、でも支える人は増えない。」

クラウド、SaaS、ゼロトラスト、BCP対応…
中小企業のIT環境は進化しています。

しかし、それを支える情シス部門は「1人または兼任」が当たり前。
障害対応・セキュリティ対策・社内ヘルプ…
すべてが“止めてはいけない業務”でありながら、
限られた人手で対応し続けているのが現実です。



- ✦ 約60%の中小企業が「IT専任者1名以下」
 - ✦ 約15%はIT担当者すら不在
- ※出典：IPA「デジタル時代のスキル変革調査2023」

支える人が少ないは、もう特別な話ではありません！

中小企業では、ITを支えるのは「1人の担当者」または「他部門との兼任者」であるケースが大半を占めています。専任者が複数名いる企業はごくわずかで、場合によっては「誰も見ていない」という状況すら起こっています。

この体制のままでは、障害対応やセキュリティ対策、ユーザー支援などを同時並行で行うことは難しく、「止まってから動く」対応が常態化してしまうというリスクをはらんでいます。

体制の脆弱さ = **止まるリスクの温床** になっています。



止まるきっかけは、いつも「よくある対応業務」から始まる

拠点のルータが落ちていた

VPNが繋がらないという電話

新入社員のアカウント登録と設定



利用者からの「PC遅い」相談

ベンダー変更時の設定引き継ぎ漏れ

セキュリティソフトの更新通知

こうした**日常対応**の中にこそ、重大なリスクが潜んでいます。

たとえばVPNトラブルの発見が遅れば、営業が業務不能に。
担当者が不在のままルータが落ちたら、物流が止まるかもしれません。

「誰かが見てるはず」「そのうちやるつもりだった」
——その**油断**が、会社全体の停止につながることも。

「止まらないIT」は、日常業務の仕組み化から始まります。

では、このような状況をどう変えられるのか・・・



「よくある悩み、どう乗り越えた？」

導入事例①製造業A社

Before 導入前の悩み	Action 導入したこと	After その後の成果
 拠点のネットワークが老朽化し、トラブルの原因特定に時間がかかっていた	ネットワーク構成の棚卸しとドキュメント化	トラブル発生時の初動が明確に。 担当者1人でも回る体制に
 機器管理や設定が属人化。構成図もなく、誰も全体像を把握できなかった	死活監視＋アラート通知＋障害一次対応を仕組みで構築	管理工数が減少。外部とも連携しやすくなり、社内の安心感が向上
 IT担当者は1人。トラブル発生時は「まず何を見ればいいのか」から始まる状態	対応手順と連絡体制を標準化し、担当者不在でも進められる運用に	結果として、BCPやセキュリティ対策の視点でも評価されるように

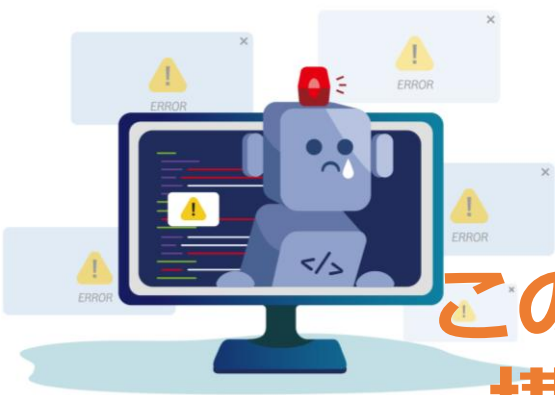
※本事例は、実在企業の導入事例をもとに内容を一部編集・再構成しています 参考URL : <https://www.e-bcc.co.jp/case/>

「止まらないIT」は、担当者の努力ではなく、仕組みの整備から始まります。



中小企業が直面している、IT運用上の5つの構造的課題

No	課題	背景・構造的要因
①	人材確保ができない	IT人材が都市部／大企業に集中 採用も育成も難しい
②	属人化が進んでいる	ドキュメント未整備 共有文化が定着していない
③	障害対応の初動が遅れる	死活監視がない 通知ルートがその人だけ
④	ベンダー管理が煩雑	機器ごとに契約・保守窓口が分断
⑤	社内での説明材料がない	レポートがない＝経営層に説明できない



この課題は「誰かが頑張れば解決する」ものではなく、
構造そのものを見直すことでしか変えられません。

「止めない体制」は、「全部社内で持つ」から脱却することから始まる

丸投げではない、設計と一緒にするという選択肢

これが今の中小企業にとって最も現実的な運用の形です。

課題

障害発生時の初動判断

夜間・休日対応

ベンダー連携

対応

結果

毎回その人次第になる

対応できない

確認のたらいまわし

ではどうすれば??

- ✓ 運用の一部を**共に設計・分担**する外部パートナーの活用
- ✓ 監視・通知・一次対応・レポートなどの「**止めない仕組み**」だけを任せる設計
- ✓ 「情シスは判断と社内調整に集中」「反復作業・初動対応は外部に」

現場の努力では限界です。

この構造を仕組みで支える体制に変える必要があります。

■ 複数ベンダー対応を「1つの窓口」に統合し、工数を削減

導入事例②製造業B社

Before 導入前の悩み	Action 導入したこと	After その後の成果
拠点ごとにネットワークベンダーが異なり、 障害時の窓口がバラバラ	監視・アラート・保守連携を一元管 理の外部窓口を集約	問い合わせ・対応工数を約半分に削減 (社内で体感)
問い合わせ先を探すだけで半日…	異常時は外部がワンストップ対応 (必要に応じて社内連絡)	トラブルが発生しても、担当者が “動く前に通知が来る”状態に
担当者1名で、トラブルが重なると すぐにパンク	月次でトラブル傾向をレポートし、 改善提案も共有	負荷が減った分、社内IT整備やセキュリ ティ強化にも手が回るように



「ITを全部持つ」のではなく、
「必要な部分を支える設計」に変えただけ。
それだけで、情シスの仕事が回るようになった

■今こそ止まらない体制を考えるべき理由

その運用、担当者がいなかったら回りますか？

属人依存

拠点のルータが落ちていた

マニュアルが口頭・メモ

退職が発生すると止まる

仕組み化

仕組み化

アラート通知一次対応
→報告が自動で流れる

共有化された手順書
・可視化フローがある

退職が発生し回らない

仕組みがあれば、誰かがいなくても回る。
それが、「止まらないIT」の第一歩です。



運用負荷・リスク簡易診断チェックシート

No	質問内容	Yes/No
①	死活監視の仕組みが常時稼働している	
②	アラート通知は自動で社内に届くようになっている	
③	障害一次対応のフローが共有されている	
④	設定内容や構成図は最新状態で社内共有されている	
⑤	担当者が不在でも対応できる「代替手順」がある	
⑥	ネットワーク障害時の連絡先（ベンダーなど）が一元化されている	
⑦	月次など定期的なレポートで運用状況を可視化している	
⑧	問題が発生した際の経営層への報告ルートが明確にある	
⑨	外部委託している業務範囲と社内対応範囲が明確になっている	
⑩	拠点ごとに運用体制や機器構成に大きな差がない	

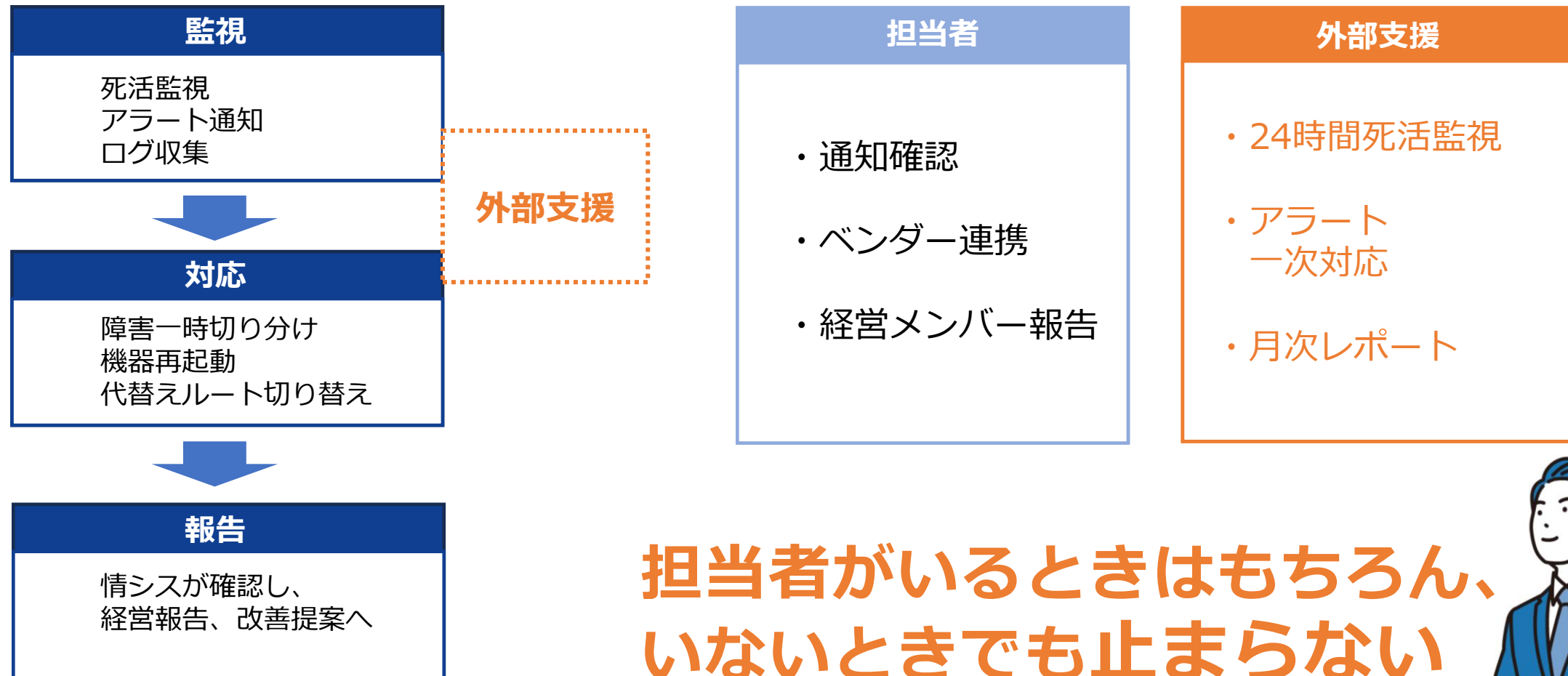
- Yes 8～10個：安定運用の好循環ゾーン（強みを活かした改善へ）
- Yes 4～7個：グレーゾーン。止まるリスクが潜んでいます
- Yes 0～3個：高リスク運用。早急な体制見直しが必要です

いくつYesがありましたか？

少しでも不安があれば、次ページ的设计例をご覧ください。



■ 情シス1名でも「止まらない」運用体制の設計イメージ



担当者がいるときはもちろん、
いないときでも止まらない
仕組みが運用の鍵です。



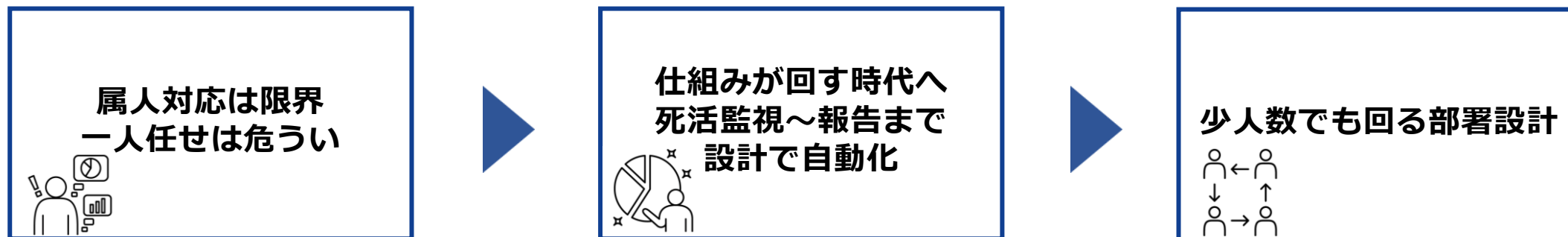
■ まとめ「だから、今こそ止まらない体制を考えるべき」

中小企業のIT運用は、ますます高度化・複雑化しています。

しかし、それを支える体制は「1人情シス」や「兼任担当者」という限界構造のまま。

属人化・トラブル時の混乱・説明責任の重圧……

いずれも、**仕組み**があれば回避できることばかりです。本資料でご紹介したように、全部を自社で抱えるのではなく、「支える設計」を見直すことで、**止まらないIT**は、十分に実現可能です。



すべてを「人」で回すことは難しい。
だからこそ止まらない仕組みを考えることが重要です。

BM Xとは



情シスのストレス、BM Xで解消します！

ネットワークは今やビジネスを支える重要なインフラとなりました。

働き方改革を背景に、クラウドが普及した一方で **ネットワークの複雑化** や **運用負荷の増大** が課題となっています。

BM Xは、マネージドサービスとして運用負荷を軽減し、必要な機能を選択・組み合わせることで、シンプルかつ最適なネットワーク環境を提供します。特に、**情報システム部門のリソースが限られた企業**や、**多拠点展開で各拠点にネットワーク専任者を配置できない企業**に最適です。BCCの運用部隊がしっかりと管理し、拠点にネットワーク管理者がいなくても安心してご利用いただけます。

お客様に寄り添い、共にネットワークを創るサービス ～ BM Xシリーズ ～



BM Xについて

必要な機能を選択し、組み合わせるだけ！

貴社のネットワークの課題を聞き出し、最適なソリューションをご提案いたします。



VPN



セキュリティ



ワイヤレススイッチ



クラウドPBX



データバックアップ



ネットワークに関して、機能追加もおこなえ、段階的な導入も可能です。

当社のお客様に提案したBM X事例

林化成株式会社 様



 林化成株式会社

業種 : 製造販売業
規模 : 中小企業
拠点数 : 国内 4 拠点

長年ブラックボックス化していた **ネットワークを整理し可視化！**

SASEを合わせることで、セキュリティと運用管理をクラウドへ

こちらの事例の続きはこちら

 <https://www.e-bcc.co.jp/case/hayashi-kasei.html>

課 題

！ 前任が1人でシステムを運用しており**ブラックボックス化**していた。

！ 運用管理やセキュリティの観点で**オンプレミスからクラウド**への移行を検討していた。

！ 自社でセキュリティを設定していたため業務に支障が出ていた。

導 入 後

 ネットワーク可視化とクラウド管理に特化した**ルーターと無線アクセスポイント**を導入。

 **SASEサービスを導入しセキュリティ**をクラウド化することで負担なくセキュリティレベルを向上。

 SASEサービスと連携可能な **リモートアクセスサービス**を導入し社外端末も**セキュリティを一元化**。

他にもたくさんの事例を掲載しております

 <https://www.e-bcc.co.jp/case.html>



おすすめお役立ち資料

SASEの基礎を解説！～SASE初級編～



この資料でわかること

- ✓SASEの市場調査
- ✓SASEが注目される背景
- ✓SASEのメリット・デメリット
- ✓当社のお客様に提案したSASE導入事例

フォームご登録 > 完了

個人情報の取り扱いについて
本サイトにて収集いたしましたお客様の個人情報(以下、「個人情報」)については、BCC株式会社では、JIS Q 15001:2017「個人情報マネジメントシステムの要求事項」に基づき、下記の通り取り扱わせていただきます。

個人情報の取り扱いに同意する
本フォームでは個人情報と紐付けてWeb閲覧履歴を取得しています。
☐ 同意する

会社名
(例 山田株式会社)

役職
(例 部長)

氏名
姓: 名:

E-mail
半角文字 (例 user@e-bcc.co.jp)

資料をダウンロードする

セキュリティ分野で最近よく耳にする言葉や企業の情報システム担当者様であれば知っておきたい重要なキーワードについて、まずは基礎をわかりやすく解説します！



詳しくはこちら ▶

最後に

当社が提供するマネージド・サービス BM Xはシステム担当者の皆様の負担を軽減するだけでなくシステム運営に必要な人材の雇用・教育などのコスト削減にも繋がります！

ご興味がある方は是非当社までお問い合わせください！



詳しくはこちら



会社概要

商号	B C C株式会社
事業所	東京本社 : 東京都千代田区外神田 6-15-9 明治安田生命末広町ビル 9F 大阪本社 : 大阪府大阪市中央区今橋 2-5-8 トレードピア淀屋橋 9F
創立	2002年3月
代表取締役社長	伊藤一彦
カンパニー名	IT営業アウトソーシングカンパニー
カンパニー長	松村健太
主要部門	・ 営業アウトソーシング ・ ソリューション
許認可	労働者派遣業（派27-302361） 有料職業紹介事業（27-ユ-302045） プライバシーマーク認定（第10861424(08)号） 電気通信事業（E-28-03972）
主要取引先	株式会社インターネットイニシアティブ(IIJ) 日鉄ソリューションズ株式会社 ダイワボウ情報システム株式会社 日本電気株式会社(NEC) 富士ソフト株式会社

